
新古事記

安楽樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新古事記

【コード】

N5002Q

【作者名】

安楽樹

【あらすじ】

異なる武道を会得した高校生たち。その手にした武具から聞こえてくる声に導かれ、辿り着いたのは何だか戦国時代のような古き日本に似た国。次第に巻き込まれていく戦によって、目の当たりにするリアルな戦場での生活。凄惨な中にも存在する日常によって、少女少女たちは自分の中の何かを求めて成長していくのだった……。

よくある異世界召喚ものの、オリジナル戦国時代設定です。

序章 零と沙波

「せいっ、せいっ！」

道場の窓から、威勢のいい掛け声が響く。その古い道場の中では、一人の少年が一心不乱に素振りをしていた。少年はまだ若い。……おそらく十七、八歳だろう。

百七十センチほどの身長にほっそりした体型。身に付けた剣道着が良く似合っていた。黒い髪は少し長めで、前髪がもう少して目に掛かりそうかというくらいだ。しかしまだその下から覗く眼差しは、この年頃にしては似つかわしくないほど強い光を放っていた。

差し込む朝日が刀身に反射して、天井を照らす。

……見た所、道場はかなり古い。しかし、今にも朽ちそうな古ぼけた建物ではなく、どことなく気品を感じさせるような古めかしく奥ゆかしい建築物だった。

窓から照らす朝日が少年の横顔を映し出す。床にもその光は反射して、早朝の心地よい爽やかさをより一層増していた。その何十畳もありそうな広さの床には、誇り一つ積もってはいない。それは、素振りの前に少年が全て雑巾がけをしていたからだ。

起き抜けの道場の掃除と素振り。……それがいつもの彼の一日の始まりだった。

質素で清潔な道着を身に纏い、既に数十回は続いている運動の疲れも感じさせず、彼はただ素振りを繰り返す。額から伝う汗が顎の先から一雫、また一雫、綺麗に磨かれた道場の床へと落下した。まるで彼以外、全て時が止まったような、そんな静寂の世界。

……そこにたった一つ、静寂を破る足音が近づいて来る。

道場の東側、差し込む朝日の中心にある横開きの扉が開いて、人影が入ってきた。閉められた扉によって逆光が遮断された時、そのシルエツトが明らかになる。……そこには一人の少女がいた。

「……またそれで素振りしてるの？零^{れい}」

ゆっくりと少年に近づきながら、少女はそう呼びかける。少年は彼女に気付いているのかいないのか、まったくそちらの方を見ずに素振りを続けていた。そんな彼に少女もそれ以上は話し掛けず、少し離れた場所に座って、素振りを続ける彼をじっと見守っている。その眼差しには、存在を無視された苛立ちも込められておらず、とても暖かく穏やかな光に満ちていた。

「九十九、……百！」

刀を振り下ろした姿勢のまま、最後にそう呟くと少年は動きを止めた。大きく息を吐いた後、足元に置いてあった鞘を持ち上げ、刀をしまった。

少年の持っていた日本刀は、まだ暖かさもあり含まれていない朝の光に反射して輝いていた。それは一般的な日本刀よりも少し長い。普通の物は五十〜六十センチぐらいだが、この刀は九十センチほどもある。もちろんそれに応じた重さもあり、素振りの訓練には最適だった。

「相変わらずね」

再びそう話し掛けた少女に、少年は少し驚いて振り向いた。

その先に立っていた少年と同じ年ぐらいの制服を着た少女は、道場の入り口のすぐ横で鞆を抱えたまま少年の様子を見ていた。

身長は少年よりも十数センチほど低いだろうか。背中まで伸びた艶

のある黒髪が、道場に吹き込む風になびいて揺れる。それを見た少年は何故か唐突に、もう春が近くまで来ていると感じるのだった。

「……沙波、さなみ来てたのか」

そこで初めて少年は、沙波と呼んだ少女の存在に気付いたらしい。そのまま汗を拭きながら彼女の横まで来ると、床にばたつと横になった。

「あゝ、疲れた〜」

先ほど素振りをしていた時の真剣な表情とは打って変わり、少年の仕草は非常にくだけたものになった。それだけで、二人は親密な関係だという事が判る。ただ、その微妙な距離から、まだ想い合っている仲、というわけではないようだった。

「また真剣なんか持ち出して。お爺さんに怒られるわよ?」

沙波はそう言つて、零と呼んだ少年が手に持っている刀を見る。確かにその手には、大きな刀が握られていた。……その大きさはかなりの物であり、片手ではまず持ち上げられないような長さで重さだった。今は鞘に包まれているが、その鞘だけをとつたとしても、深みのある、渋い深緑にも藍色にも見える色の光沢が表面を彩り、多量なりとも詳しい人間であれば、さぞ名のある業物であると判つただろう。

そんな業物を床に無造作にごろりと転がし、零はそのままゴロゴロと床を転がった。そして今度はうつ伏せで止まる。

「大丈夫だって、爺さんもう諦めてるから」

悪びれもせずそういう零に、沙波は肩をすくめて見せた。確かに家の道場なのだから銃刀法違反にはならないのだろうが、それにしてもこの少年は、どこか常識が欠けている。沙波は以前から、そんな感想を抱いていた。

「お前こそ、今日の稽古はどうしたんだよ」

「へへ、今日はお休み」

沙波は照れくさそうに言うと、零から目を逸らした。……やましい事があるに違いない、と零は直感していた。沙波を見る目が細くなる。

「……どうせ自主的にだろ」

ははは……、と沙波は頭をかいた。この二人はいつも登校前に自宅で稽古をするのだ。それから沙波が零を迎えに来る、というのがいつもの日課だった。

「それより、早く行かないと学校に遅れるよ」

話を誤魔化すように、沙波は言った。確かに、もうすぐ登校時間だ。「先に行けよ」

そんな沙波に零は冷たく言い放つ。彼にとって、ちょうど今は稽古の後の心地よい休憩時間だった。それに、稽古をサボった沙波に対して少し意地悪な気持ちもある。

「ひどーい。私が登校中に変質者にも会ったらどうするのよ」

口元に握り拳を当てながら、沙波はそう言っておどけて見せる。零は寝転んだ姿勢のまま顔だけをそちらに向けた。少女に向かって、白い視線が飛ぶ。

「お前は俺が守らなくても大丈夫だろ」

実際にそうだった。零は剣道をやってはいるが、素手だったら沙波に勝てる見込みはない。彼女の家は合気道を教えており、しかも彼女自身に至っては三段なのだ。だから特に深い考えがあったわけではなく零はそう言ったのだが、彼の予想に反して、当然予想していた彼女からの文句は返って来なかった。

「……」

いつもなら、「よくそんなひどい事言えるわね！」と威勢良く怒声が返ってきたり、それが逆鱗に触れて固め技の一つや二つかけられ

る事もあるのだが、今回はどちらでもなく、彼女はただ黙ったまま俯いていた。

そしてそのまま道場を出て行くこととする。

「お、おいどうしたんだよ!？」

いつもと違うその様子に、零は慌てて飛び起きる。その拍子に、足に当たった刀がガタンと音を立てて転がった。そして、少しだけ刀身が覗く。

「……………くれるって、言ったのに……………」

沙波が小さく呟いた。しかしその声は、零には聞こえていなかった。

「おい、沙波。どうしたんだよ」

零は道場の入り口で止まっている沙波の肩を掴んで、こちらに振り向かせる。その勢いで、沙波が制服にしまっていた首飾りが服の外に零れた。シンプルな紐に、透き通った勾玉が付いている。それは、彼女の家に代々伝わる家宝だった。水晶でできているその勾玉は、透明な光で溢れていて、丁度朝日の光を吸収し、まるでそれ自体が発光しているかのような眩しさを与えていた。

振り向いた沙波の目には、うつすらと涙が滲んでいる。零はそんな彼女を見て、妙な焦りを覚えるのが判った。慌てて、それほどの事をしたかどうかと自分の言動を省みてみたが、よく判らなかつた。

「何でお前……………」

零がそう言いかけた時、突然大きな違和感が二人を襲った。

『!?!?』

「……………なんだ?」

「何……………?」

その違和感は喻えようの無いものであったが、敢えて近い表現をす

るのならば、それは『引つ張られる』と言う感じだった。ただしそれは、体の中心もしくは、体の外全てへ向かつているような、現実では有り得ないような方向へ向かう引力だった。しかし彼らは、ある種の引力を確かに感じていた。

引力と共に、耐えられないほどの吐き気が襲ってきて、立っていられなくなる。零はこの違和感を憶えているのは自分だけかとも思っていたが、沙波を見ると彼女もやはり同じ感覚を憶えているようで、体がふらついていた。そして、そのままこちらに体を預けてくる。

「沙波……」

すっかりしろ、と言いたかったがうまく言葉が出ない。掠れたような声で、彼は自分に寄り掛かっている少女の名を呼んだ。……心なしか、彼女の首から下げている勾玉が明滅しているような気がする。

「零……」

零の声に彼女も答えた。目の端に、彼がさっきまで素振りをしていた刀が映る。少しだけ覗いた刀身が、彼女には何だか発光しているように見えた。

『……再び歴史は動乱の時を迎える……若き龍よ、我が呼び声に応えよ……』

どこからか、そんな声が聞こえる。彼は、これは幻聴だと思った。なぜなら、その声は彼がいつも使っているあの刀から聞こえたような気がしたからだ。

「誰だ……」

辛うじて、それだけの声が出せた。……しかし、それに答える声は無かった。どんどん体は自分の物で無くなっていく。高熱にでも浮かされているような気分だった。外はまだ早朝だと言うのに、辺りが暗くなっていく。もはや太陽の光も、道場の床も天井も見えない。

急速に闇に侵食されていく中、たった二つだけ光っている物が見えた。……それは、あの刀と勾玉だけだったのだが、もう殆ど意識を失っている二人には、その事はもはや判らなかった。

心も体も真つ暗な闇の中に沈んでいく中で、零の脳裏には、何故か小さい頃の記憶が甦ってきていた。

公園にいる、幼い女の子と男の子。

女の子は泣きじゃくり、男の子が一生懸命それをなだめている。

(……そうか、沙波はいじめられっ子だったな。昔はそれでよく泣いてたっけ。)

そんな記憶が思い出される。

「うええ〜……」

「もう泣くなよ」

「だって……」

女の子は両手でゴシゴシ目をこすっている。涙が次から次へと溢れて止まらなかった。

男の子の目が、真つ直ぐ女の子の瞳を見る。

「俺が絶対 から!」

何と言ったのか、意識が薄れてよく思い出せない。

「ほんと?」

女の子の涙は止まる。

「うん、絶対」

「約束だよ?」

「ああ、だ」

そして彼の意識は遠くなっていく。

……次に二人の目に映ったのは、地獄だった。

序章式 拳侍

「そいつは俺に向かって言ったのか？オイ？」

少し薄暗くなつた表通り。繁華街の喧騒の中で、数人の男達が睨み合っていた。

「ああ？」「なんだあ？」

片方は学生らしい出で立ち。もう片方は若いチンピラ達だった。人数は一对三。誰が見ても、明らかに険悪な雰囲気だ。

「俺に言ったのかつて聞いてんだよ！」

学生の方がもう一度言う。負けん気の強い目と、がっしりとした体格が特徴的な少年だった。その学生は高校生ぐらいで、短めの髪を立て、はだけた学ランの前からはTシャツが覗いている。そして両方の拳には、何故かバンテージを巻いていた。

「だったらどうしたよ。やんのかよ!？」

「三人相手に勝てると思つてんのか!？」

チンピラ達は、口々にそう言つて凄む。どう見ても、自分達の方が優勢だと思つているようだ。完全に相手をなめたように、無防備のまま近づいていく。

どうやら相手は学生一人。もう少し凄んで見せれば、びびって逃げるに違いないと思つているようだ。

「言つとくが、俺は負けんのが大っ嫌いだからな」

そんなチンピラ達に一步も引かず、学生は詰め寄る。その鋭い目つきは、獲物を捉えたまま動かなかった。そしてただ、拳を堅く握る。

(三対一か……)

拳侍の脳裏を、一抹の不安がよぎる。

しかしそんな考えはすぐに、この喧嘩に勝つ方法へと切り替わった。目まぐるしく、彼の頭の中を周辺の地形、人込み具合、使えそうな道具などが浮かんでくる。……こういった状況は初めてではない。

岩浪拳侍。それが彼の名前だった。彼の尊敬する祖父に付けてもらったこの名前を、汚すわけにはいかない。この勝負、決して負けるわけにはいかないのだ。拳侍はそう考えていた。

きつと彼の友人に、彼はどういう性格かと聞いたら、必ずこう答えるだろう。『馬鹿がつくほどの負けず嫌い』と。現在の状況においてさえ、彼は真剣に勝つことを考えていた。

「だからなんだってんだよこのガキ。いい加減にしねえとマジでやっちまうぞゴルア？」

怖さを通り越して、既に面白い部類に入りそうな表情をしながら、チンピラのマサ(仮)は拳侍に詰め寄ってきた。

二人の間の距離は、およそ10cmほどだ。……何故チンピラ達は、必要以上に接近してくるのだろうか。そんなどうでもいい考えを振り払い、拳侍は呼吸を整える。シュツと小さく息を吸った後、行動を開始した。

「あがつ！」

マサ(仮)の顔が、大きく仰け反る。ノーモーションの拳侍のアッ

パーが顎を直撃したのだ。同時に、右足を相手の向こう脛に打ち込む。

「イデッ！」

相手が崩れ落ちるのを待たずして、拳侍は走り出した。もちろん後ろにだ。まだ時間が若干早いせいか、通りの人影はまばらだった。走るのにあまり苦にはならない。

チンピラたちはしばし呆気にとられていたが、すぐに我に返ると、自分達の面子に賭けて拳侍を逃がすまいと追撃を開始した。

「てめえこのっ！」

しかしチンピラ三人組のうち、マサ（仮）だけはすぐに置き去りにされてしまう。よく見ると、ひよこひよここと左足を引きずっていた。……どうやらさっきの蹴りが効いているらしい。弁慶ですら耐えられないのに、そこらのチンピラが耐えられるはずも無いだろう。もちろん、それを見越しての拳侍の作戦だった。

「あ、兄貴っ！」

それを見た他の二人は仇を取ろうと、より血眼になって追いかけてくる。それを背中を感じながら、拳侍は頃合いを計って路地を曲がった。繁華街とはいえ、大通りを曲がってしまえば、もう薄暗い路地だ。

「おい待てっ！」

当然、チンピラたちはそれを追いかけて曲がった。何も考えていない。……何も考えていないので、吹っ飛んだ。

「どあつ！」

拳侍は曲がり角で待ち伏せしていたのだ。そして相手が曲がってくるタイミングを計って最初の男の足を払った。前のめりに倒れこんだ相手に追い討ちをかけるように、体重を乗せた蹴りを、その背中に向けて振り下ろした。……チンピラのジョージ（仮）は悶絶した。道路を転がりながら痛みをこらえ、げえええつと胃液を吐いている。通り掛かりの人達は、それを横目で見ながらも、出来るだけ関わらないようにしようと、足早に過ぎ去っていった。

「兄貴いつ！」

一人取り残されて最後に到着したチンピラ、ノリ（仮）は兄貴の容態を気にしつつも、バンテージを巻いた学生に注意を払った。しかし、もう不意打ちはどこからも来る事は無く、当の学生は路地の少し奥でじつと佇んでいた。その向こうは壁だ。

ノリは、もう卑怯な手は無いはずだと思いながらも、じりじりと拳侍に近づいていった。立て続けに二人も兄貴分がやられたのだ。これで何もやり返さなかったら自分の面子に関わる。それ以上に、後で兄貴達に何をされるか判らなかった。様々な感情が入り混じりながらも、確実に怒りが沸いてきて、散々痛めつけてやらなければ気が済まないほど、彼の腹わたは煮えくり返っていた。

「もう逃げ場は無いぞ、くそガキ」

「……」

拳侍はただ黙っている。それを恐怖と見たのか、ノリはやや余裕を持って構える。……普通に考えれば、こんな学生に自分が負けるわけがないのだ。

「どうした？もう何の策も無いのか？」
「……」

馬鹿にするように言った言葉に、やはり拳侍の反応はない。その沈黙が不気味で、ノリは近づくタイミングを失っていた。額に汗が浮かぶ。兄貴が来るまで待とうか、という考えが浮かびかけた時、相手は口を開いた。

「かかってこないのか？」

その余裕に満ちた台詞にとうとうノリの堪忍袋は耐えきれず、咆哮と共に拳侍へと襲い掛かった。顔面目掛けて右拳が走る。っ！が、次の瞬間、顔面に拳がめり込んでいたのは、彼の方だった。……一瞬何が起きたのか判らない。数秒遅れてついて来た記憶で、自分の拳が相手の左手によって受け流され、逆にカウンターを食らったと言う事が判った。

(空手……？)

崩れ落ちる前に、それだけが思い浮かんだ。そしてすぐに彼の意識は途絶える。這いつくばった二人のチンピラに目もくれず、拳侍は路地裏を出て行った。

拳侍はゆっくりりさっきの場所まで歩いて戻った。すると、最初に殴られたチンピラのマサが、携帯電話で一生懸命子分たちに連絡をとろうとしている所だった。

何気ない足取りで拳侍が近づいていくと、彼はギョツとしてこつちを向いた。明らかに何の傷も受けていない拳侍を見て、彼の怯えの表情が簡単に見て取れる。

待てよ、ただ逃げ切ってきただけかも……。でも、さっきから電話が繋がらないのは……？そんな考えがぐるぐると、マサの頭を巡る。しかしそこはさすがチンピラ。表情ほど簡単に怯えを見せないのは彼らの専売特許だった。

拳侍が目の前まで来ると、マサはうめくように言う。

「て、てめえ卑怯だぞ……」

「何言ってるんだ、三対一だぞ。どっちが卑怯だよ」

悪びれないその言葉を聞いて、マサの脳裏に一瞬ある記憶が甦った。

「ま、……まさかお前が、バンテージ学生……!?!」

「うっせえな、その名前で呼ぶんじゃないよ」

『バンテージ学生』……、チンピラ仲間で噂されている通称だった。関わったら最後、どんな手を使っても勝てない。勝利への執着は警察よりも性質が悪い。関わらない方が身の為だという話だ。しかも、その背後にはとんでもない権力が潜んでいると言う……。

そう言えば、いつも学ランにTシャツを着ていると言う話を聞いた事がある。まさか本当に存在するとは……。都市伝説じゃなかったのか……。

マサ（仮）は、急に焦り始めた。……な、何とかこの場を切り抜けなくては……。

「わ、悪かった。まさかお前がそうだって知ってたらこんなことしなかったよ!」

「もうおせえよ」

拳侍は冷たくそれだけ言うと、拳を堅く握る。しかしその瞬間、言いようの無い違和感が彼を襲った。まるで全身から重力が消えてし

まったような、しかしその代わりに体の中心に向かって落ちていくような感覚。

目の前の男が、徐々に霞んでいく。いや、男だけでなく周囲全てのものが霞んでいた。

(やばいか……)

微かにそんな事を考える。薄れていく意識の中で、彼の右手の中指の辺りだけが光っているのが見えた。そこには、彼が祖父から貰った指輪をはめていた。

彼は目の前も頭の中も完全に霞がかかってしまうその最後まで、この喧嘩に勝てるかどうか、そんな事を考えていたのだった……。

程なくして、彼は目を覚ます。……体に微かな衝撃があつたのだ。目を覚ました彼を、何だか見覚えのあるような三人の人物たちが見下ろしていた。

「オイ、こんなところで寝てるんじゃないやねえよ、たわけが」

遠慮なく、倒れている彼の体に蹴りが放たれる。それを受けて、彼の中でまた何か湧き上がってくるのを感じた。熱い、燃えるような何かだ。

彼はゆっくりと身を起こそうとする。何だか体がふらついていたり、全く変わってしまった周囲の状況がいまいち判らなかったが、それでももちろん彼はこう返した。

「オイ、そいつは俺に向かって言ったのか？」

序章参 双葉

「ゴホッ、ゴホッ」

何て誇りっぽい部屋なんだろう。

彼女はさつきからずっと咳き込みながら掃除をしていた。彼女の名は双葉。八千草双葉と言う。

八千草流弓道場の娘であり、双子の姉でもあった。……ちなみにもう一人の、妹の方は一葉と言う。二人共知らなかったが、近所では評判の器量の良い姉妹として、この凧之原町二丁目の間では密かに人気があった。

八千草家には彼女たちの他に子宝に恵まれなかったため、父、八千草樹いっさきはこの二人をとても可愛がっていた。それは正に目の中に入れても痛くない程といっても過言ではなく、その為に近所でも人気の姉妹と噂されていたのだが、当の本人たちにとっては残念ながら、その天敵の存在のために、今までに悪い虫に寄り付かれるような事は無かった。

その厳格な父の八千草家の掟により、門限は七時と定められていて彼女らはほとんどカラオケやカフェで喋って時間を過ごす、と言った良くある女子高生の放課後を過ごす事は無かった。

彼女たちはいつもクラスメイト達の浮いた話をいつも羨ましがって聞いており、いつも姉妹の間で持ち出されるのは、早く自立して家を出て、素敵な人を探したいね……という話題だった。

しかしこの話題は、この後彼女に起こる出来事によって、全くの余談となってしまうのだが。

「あゝあ、やっぱり買い物にしたら良かったかな」

埃を吸わないように、白い三角巾をマスク代わりにしながら、双葉はぼやいた。

松山に弓道の師範として出稽古に行っている父から頼まれた仕事は、買物か掃除の二択だった。寒がりの双葉にとって、この二月のくそ寒い中に外を出歩くなどというのは拷問に等しい選択だった。

父から留守中の仕事を頼まれた時も、「一葉、買いたい物あるって言ってたよね？ついでに買ってくれば？」などと言うと、物分かりのいい妹は「……そう？じゃありがたいくらいお言葉に甘えて、ついでに行つて来ようかな？」と、承諾してくれたのだった。

そして見事双葉は、裏庭にある古い蔵の清掃権を獲得していた。妹の一葉は先程、たまの外出に少しでも出合いの可能性を高めるため、精一杯のおめかしをして出掛けていった所だ。

……しかし、いざ実際に掃除を始めると、あまりの荷物の量とそれ以上の埃の量に、双葉は喘息寸前だった。

まだ半分も終わっていなかったが、早くも「休憩、休憩」と、外に出る。

「うわっ何これさぶっ！凍るって」

双葉は外のアマリの寒さに、慌てて蔵の中に戻る。

(確か、近いうちに雪が降るって言ってたっけ……)

雪が降るのは許せるが、これ以上寒くなるのは勘弁して欲しかった。意外にも、外に比べたらまだこの蔵の中の方が寒くなかった。……古い蔵には、まるで何十年も前から変わっていなかったかのように、空気が溜まっている。

仕方なく、双葉はまた両手を動かし始めた。

「まあ、どーせ買い物に行ってもそれはそれで文句言っただらうしな〜」

どうしても孤独な単調作業になると、独り言が増えてしまう。鼻歌でも歌いながらやるうかとも思ったが、何気なく頭に浮かんでくるメロディといえば、今の所何も無かった。

「……………それにしてもお父さんてば、何でせつかくの休みの日なのに掃除なんてしなくちゃいけないのよ全く……………」

文句は言ってみたものの、例えこの掃除などという気が乗らない出来事が無かったとしても、双葉に入っている予定など何も無い。友達はいつもみんな、休みの日には「ごめん、デートだから……………」なんて言っただけの断るのだ。

……………結局の所、双葉には同じ境遇の一葉と過ごすしかないのが毎週の予定だった。

「ただいまーっ」

(……………あの声は一葉？ちょっと早過ぎじゃない？)

双葉はそう思ったが、実際の所、商店街まで出て帰ってくるのには少し遅かったほどの時間が経っていた。……………つまり、双葉の方が時間が掛かり過ぎていたのだ。得てして、掃除というのはそういうものである。

ともかく、帰ってきたのなら丁度いい。この、途方に暮れるほどの好敵手を相手に、ようやく強力な助っ人が現れたのだ。これを放っておく手は無い。

「おかえりーっ！」

やや下心がこもったが、それが表には現れないように双葉は返事をした。そして蔵を出ると、うまい誘いの口実を考えながらトタトタと玄関まで走る。

「おかえりー、あのさー葉……」

「あ、お姉ちゃん」

「ど、どうも。お邪魔してます」

「!?!」

……その時の双葉の心境を表すとしたら、『ガガン！』という音が一番似合っただろうか。

玄関で双葉を出迎えたのは、よく知っている妹一葉と、あまり知らない隣のクラスの確か……葎原とか言う同級生だった。双葉の手から、持っていたハタキが音を立てて落ちる。

「あ……あ、あ……」

「あの、お姉ちゃん？知ってるよね？葎原君。……丁度買い物帰りに会って、荷物運ぶの手伝ってくれたんだ。折角だからお茶でもって思っ」

「あ、俺すぐ帰るから」

「いいよいいよ。今日お父さんいないし」

「……そうなの？」

あまりの衝撃に、状態変化の特殊効果の付随した攻撃を受けたように全身固まってしまっている双葉をよそに、何だか初めて家に遊びに来たカップルのような二人の会話は続けられている。

勿論、一葉が家に男の子を連れてくるなんて初めての出来事であり、ここに彼女たちの父親がいれば『八千草家始まって以来の大事件』

になることは間違いなかった。

(おのれ、裏切り者……！)

双葉は心の中で、実の妹を般若のように睨みつけていた。そしてなんとか、にこやかな表情のまま、「ど、どうぞごゆっくり……」とだけ何とか口にすると、ハタキを拾ってジリジリと玄関から後ずさる。そのまま玄関から死角になる所まで隠れると、固まった表情のまま父の寝室へと向かった。

今時珍しい木造一階建ての八千草家は、もちろんどの部屋も畳だった。昔双葉たちが小さい頃に「フローリングの部屋がいい」と父にねだっても、すぐさまその願いは却下されるほど、隅から隅まで和風な作りだった。

廊下の突き当たりを右に曲がり、左側の襖を開けた父の寝室は、約十四畳ほどの広さがあった。置いてある家具類は最小限の物しかなく、何となく寒さを感じさせるほどの空間の奥に、古めかしい仏壇が置いてある。

双葉はそろそろその仏壇の前まで進むと、床に膝を着いた。

「母さん、一葉が男を連れてきた……」

正面の額に飾ってあったのは、双葉と一葉の母、……そして父、樹の妻”八千草香織”の遺影だった。二人が小さい頃、母は病気を患って他界している。それからは、姉妹、家族の間で何かあった時は、母親に報告をするのが八千草家の習慣だった。

「……はあ、どうすればいいんでしょうか。姉の立場が全くありません」

双葉は寂しそうに呟くと、がっくりと肩を落とした。
唯一頭の中を巡るのは、”先を越された……”という思いだった。

(それにしても、いつの間に……。あんな男友達がいるなんて聞いてない。……そう言えば、前に一度か二度名前を聞いたことがあるような……)

考えてみれば、そんな気もしてきたが、あの一葉がそんなまさか……
…と思っていたため、こんな事は全く予想もしていなかった。

しかし、玄関での二人を見ていた時に、双葉は微妙なぎこちなさを感じていた。

(まるであればよくある、“友達以上、恋人未満”のような……あ
い！いや！まさかそんな、あの一葉に限って……)

双葉は一人で力一杯首を横に振りながら、そんな悪い想像をかき消す。

(いやでも、そう悔っていたから案の定、この通りの結果になったんだし……)

何だか悩みだか後悔だかよく判らないものがずっと頭をグルグルと巡っていたため、一度気分を切り替えようと、双葉は仏壇の正面に飾ってある写真を見つめた。

……目の前にはモノトーンに彩られた彼女たちの母親が、幼い頃から変わらぬ笑顔で自分を見守っている。その安らぎに満ちた表情は、いつも彼女の心を落ち着かせてくれるのだった。

(一体どんな人生を送れば、こんなにも幸せそうな表情をする事ができるんだろう?)

……双葉はそう考える事がある。そして、まだ自分にはこんな表情はできないかな……とも。

しばらくの間、遺影を見つめた後、きちんと正座をして両手を合わせる。いつもしているように軽くお参りをすると、双葉は立ち上がった。

「一葉の奴、お父さんがいないのをいい事に抜け駆けしやがって……！」

まださっきの出来事が納得できないらしい。……彼女の父親が聞いたら、仏壇に向かって三日は愚痴と酒量が増えそうな台詞を口にした。双葉はその部屋を後にした。

襖を元通りに閉めると、また先ほど掃除の途中だった蔵へと向かう。もう既に、掃除の続きをする気はほとんど無くなっていた。

（……それよりもお父さんがいない今、私が代わりに一葉に悪い虫が見つからないように見張っておかないと！）

何故か双葉は一人、妙な使命感に燃えていた。

外の寒さも既に忘れ、掃除の途中だった蔵に戻ると、さっきまでに外に出しておいた荷物をしまい始める。

（とりあえずこれだけしまっておけば、今日の所はよしとしよう）

彼女の思考はもう自分の部屋へと飛んでいた。

きつと隣の自分の部屋からならば、会話も聞こえるに違いない。

（古い木造建築である八千草家に、プライバシーというものは無いのだフッフ）

双葉は一人、怪しく笑う。

(…………でも、もし変な事が起きちゃったらどうしよう……。ん？変な事って何だ…………?)

ようやくそこまで双葉の思考が暴走した時に、彼女の目に気になる物が映った。…………それは、蔵の片隅に置いてあった細長い包みまるで弓矢でもしまっておくような物 であつた。

「うわ、古そうな包み…………」

これでも一応は弓道初段を持っている双葉だ、その包みに興味はあつた。

…………ちなみに初段とは言つても、実際には彼女とその双子の妹の實力はそれ以上である事は間違い無い。

高校に入ってから昇段試験を受けていないので、初段のまま滞っているが、毎日の稽古を欠かしたことは無いのだ。というよりも、父が欠かさせてくれない。

別段弓道が嫌いと言うわけではないが、今は昇段試験を受けるよりももっと他の事をしたいと、双葉と一葉は常々思っていた。

『…………双葉…………』

「え？」

双葉は突然、誰かの呼ぶ声を聞いた。

辺りを見回してみるが、勿論誰もいない。と言うよりも、今の声はまるで自分の声の頭の中で聞こえるように響いてきたのだ。そのおかしな感覚に、双葉は当惑した。

サンダル姿で蔵の前に訪れた一葉は、蔵の前の光景を見て半ば呆れた。

……これならば、掃除をしない方がまだマシだったかもしれない。しかし買い物も終わり、せっかくの休日の予定もついさつき無くなってしまうた今となつては、姉といつても通りの休日を通り過ぎすのかもしれないかも知れない、と彼女は思った。

「……またこんなに物置散らかして！お姉ちゃん！」

軽く怒つたような表情で、一葉は蔵の中を覗き込む。……しかし、そこには誰もいない。

ただそこには、掃除の途中で乱雑に投げ出された古い荷物の山と、使いかけのハタキだけがぽつんと取り残されていた。

「お姉ちゃん？どこ行つたの？」

双子の妹の言葉だけが、空になつた蔵の中に響く。

だが、それはひんやりとした室内に残ることなく、すぐに落ちて消えた。

序章肆 皇耶

自分は、この時代に生まれるべきでは無かったのではないか。
……そう考える事がある。

彼、御雲皇耶は、誰もいない道場で一人、型の練習をしていた。
…彼此、三十分ほど前からだ。
年季の入った板張りの間に、少年の掛け声だけが響いている。

辺りはまもなく夕日が差し込んで来ようかという時間帯。
微かに差し込んでくる太陽の光に、少し長めの黒髪が反射する。その髪の間から見える切れ長の目が、彼の風貌に理知的な雰囲気をもし出していた。

白い道着と濃紺の袴に包まれている、華奢というほどではないが痩せている体は、すらりと高い彼の身長をより長身に見せている。

ここは近所にある、槍術の道場だった。
師範が一人と門下生が二十数人。その内の一人である彼は、小学校の頃からここに通っていた。
長い間通っている彼は、この道場の師範と随分親しくなっており、稽古が休みの日にはたまにこうして一人で使わせてもらう事もある。現在その師範代は、来客中ということではいなかった。
よって、皇耶は誰一人存在しない道場の真ん中で、一人黙々と型をこなすことができたのだった。

まずは払い。

刀などとは違い、切るといふよりは相手の足止めをするのが目的とした動作で、イメージした相手の膝元を狙って槍を鋭く旋回させる。遠心力によって程よく負荷のかかった長槍は、気を抜くと彼の体こ

と振った先へと運んでいかれそうになる。

それを皇耶は体全体の力で止め、今度は逆向きに同じ動作を行う。百回ほどそれを繰り返すと、手に心地よい抵抗と慣性による負荷がかかってきた。自分が手にしている武器の重みと、その洗練された道具の感触が伝わってくる。

彼は悩み事や考え事があると、よくここに来るのだった。

一人で繰り返し練習をしていると、集中して考える事ができるし、また気晴らしをする事もできる。

これまでも、幾度となくこの場で悩み事を解決してきた。

現在も彼にはある悩みがあり、学校の帰りにここへ立ち寄ったのだ。その悩みとは、全ての人間が抱えるものでもあり、彼独自のものでもある。

綺麗な水の底に溜まった泥を掻き出すように、一回一回の動作を着実に繰り返す。

ただ、今回の考え事はそれとは逆に、濁った泥水の中から、透き通った玉を探し出すようなものであったかも知れない。

……その悩みとは、彼の来年からの進路についてだった。

高校三年生になった彼には、ついに今後の進路を決めなければならぬ時期が到来したのだ。

皇耶は成績が悪いわけではなく、むしろ良い方だった。

進路指導の先生は、お前の成績ならば国立大も狙えると、強く推薦してくれる。

しかし彼は、国立大などには全く興味は無かった。それどころか、大学という機構自体にも関心がない。

……だが残念ながら、彼の希望を叶えるには、現在の日本では大学が一番適している場所だという事は確かだった。

彼が唯一大学に進むとしたら、その目的は、どこでも良いので文学部に入り、彼の好きな歴史について学ぶ事だ。

……彼は幼い頃から歴史の世界へ傾倒していた。

槍を習い始めたきっかけもそのためであり　いや、槍を習い始めたから歴史が好きになったのかもしれない。

ふとしばらく考えてみたが幼い頃の記憶のため、そのきっかけはもう曖昧だった。

しかし、既に今の彼にとって歴史に思いを馳せる心は、空腹になったら食事をするのと同じように、至極当然の事になっていた。

今では皇耶は、槍を選んで良かったと思っている。

近所には他にも剣道などの道場があったが、それよりも彼はもつと雰囲気があるというか、槍術の方がより『それらしい』気がするのだった。

彼はいつも日常とかけ離れた世界のこの長い槍の先に、とうの昔に過ぎ去った、歴史的な世界を思い描くのだった……。

続いての型は突き。

これも眼前にそびえ立つ敵の姿を思い描き、中心線に沿った人体の急所を正確に貫いていく。

迷いを振り払うように、渾身の力を込めて突く。

……きつとこのまま大学で歴史を学んだとしても、それを職業として過ごせる人はごく僅かだ。

自分にはそれほどの熱意が無いことも、十分自覚している。かといって、彼の父親のような普通のサラリーマンになるのも嫌だった。

「安定した生活を送れる大人になりなさい」

彼の父親は進路について話す時、決まっるところ言う。

……なんだよ、安定した生活って。

喧嘩になるのも嫌で彼は口にしなかったが、仕事から帰ってビールを飲み、煙草を吸いながら野球を観る。……そんな父親のような毎日だけは過ごしたくなかった。

安定した生活。……その先に一体何があるのか。

ただ社会の小さな部品として一生を終える。それで自分は満足などできない。

彼はずっと戦国時代に生きることを見ている。

命を懸けて戦い、策を巡らし、そして己の志を貫き通す。そんな生き様に憧れていた。

明晰な彼の頭でなくとも、そんな願いが叶えられる事が無い事は判ってはいたが、どうしてもその妄想じみた気持ちを捨てる事ができずに、その思いは歴史小説を読んだり、歴史を模したゲームに没頭する事で紛らわせていた。

決して現代では活かされる事のない武勇と知略。そんな力は自分には備わっていないのだろうか。

たとえあったとしても、それは発揮される事なく、表面にすら出ずに終わってしまう。

それが、発達した文明社会というものだ。

……平和とは、何と素晴らしい退屈な物なのだろうか。

一通りの型が終わり、彼は一息ついた。

先に丸い布のついた槍を元の場所に戻し、道場の中央に正座をする。そのまま、ゆっくりと目を閉じて息を整えた。

この社会ではもう、誰か一人の力で世界を変える事など不可能だろ

う。彼はそう思う。

周囲の友人たちは徐々に世間を受け入れ始め、平凡な道を歩んでいくとしていく。

しかし、自分はまだ自分を捨て切る事ができない。

……自分は一体何者なのか。

単なる一個人でしかないのか。

それとも、自分は何者かになれるのだろうか。

……そんな思春期の少年にありがちな思いを、彼は今抱えているのだった。

ゆっくりと目を開けた彼の視線の先に、細長い布の袋が目に入った。その袋は、道場の壁の高い位置に飾ってある神棚に奉納されていた。小さい頃、師範に聞いたら、それは業物の槍だと教えてくれた。実際に見た事は無かったが、もちろん真剣だろう。

幼い頃は全く手も届かず、周囲の目も光っていたため、中身を見ることはできなかつたが、今ならそれは届く位置にある。

あれからずつと気にしていなかつたが、ふいに皇耶の心に好奇心が芽生えてきた。

道場の片隅に置いてあつた椅子を持ち出すと、神棚の下に置いた。

その上に乗って手を伸ばす。

……悠々とそこにある槍に手が届いた。

(そんなに小さかつたかな……)

槍を習い始めた時の事を思い出し、しみじみ思う。

彼は背の高い方だとはいえ、あの頃はまだ今の身長半分程しかなかった。

奉納された槍を手に取ると、ずっしりとした重量が伝わってくる。ちらりと入り口に目を向けて、誰も来る気配が無いことを確かめた後、皇耶は槍が入っている袋を開けた。

……そこに入っていたのは、彼の想像した以上に立派な槍だった。槍が入っている事は判っていたのだし、そう驚く事は無いと思っていたが、その槍の持つている雰囲気、皇耶はしばらく息をする事も忘れ、見入ってしまった。

槍の長さは、彼の身長よりもやや高い。……百八十センチ程はあるだろうか。年代物を感じさせる漆塗りの柄に、銀色に輝く穂先。その先端は十字形に形作られている。初めて見る真剣に、皇耶は思わず息を飲んだ。

よく見ると、柄の部分に何かの紋が彫られていた。……どうやら、太陽から伸びる光を模しているらしい。槍を見ているうちに、皇耶の心に更なる欲望が芽生えてきた。同時に考える。

師範が戻ってくる前でなければ、その欲望は叶えられないだろうと。

皇耶は構えた。

大きく深呼吸をし、息を整える。

槍の穂先に真剣が納まっているのを見ると、皇耶はもう一度、最初から型をやり始めた。

やはりさっきまでの練習用の槍とは重さも感触も違う。

しかし真剣の割に、予想したよりも重くはなかった。バランスも先ほどとは違って、先が重い。

ただ練習用の槍と多少勝手は変わるが、十分彼にも振り回せるほどの重量だった。

槍を使いこなす事に集中しているうちに、目の前にぼんやりと相手が浮かんできた。

最初は一緒に稽古をしている知り合いたちの姿だったが、次第にそれは戦国時代の侍へと変わっていった。

……脳裏に浮かぶ見知らぬ景色。

皇耶の頭に、何度も想像した戦場の様子が浮かんでくる。

もし、彼が本当に戦国の世に生まれていたとしても、そこで世の中を変えるような人間になれるとは限らない。

その事も彼は十分に承知していた。

しかしそれでも、自分はただの平凡な人間だったとしても、それを知るまでは納得できなかつた。

彼自身でそれを確かめるまで、納得する事はできないのだ。

気が付くと、耳鳴りが聞こえていた。

……いや、聞こえているというよりも頭の中に響いている、というべきだろうか。

あまりにそれが収まらないため、皇耶は軽く頭を振った。……しかしそれは終わることなく響き続ける。

何故かふと、その耳鳴りは彼の持つ槍から聞こえてきているような気がした。

……誰かを呼んでいるようにも思える。

皇耶はその耳鳴りに耳を傾けるように、槍を構えたまま目を閉じた。段々と意識が薄れていくのが判る。……微かに声が聞こえるような気がした。

聞いたことは無いのに、何故か懐かしい。

『……自らの目で確かめ、そして自分が何かになれるのか、試して

みるがよからうっ……』

その言葉に、皇耶は無意識のままはつきりと頷いていた。

序章伍 華蓮

夕方よりは少し早い時刻。

人通りもまばらな斜面沿いの道を歩く、一人の少女がいた。

辺りの車通りもそれほど多くなく、周囲には夏を待ち遠しげに鳴く虫の音が微かに聞こえ始めていた。

横を向いてゆつくりと歩く少女の視線の先には、急な勾配に沿った小さな林があり、その向こうに見える風景には、彼女の住むこの町が一面に広がっている。

……夕暮れ前の朱に染まりかけたこの風景が、少女が一番好きだった。

少女の年の頃は十七、八歳ほどで、どうやら学校帰りらしく制服を着ている。その服は、この町の人間ならほとんど知っている進学校の物だった。

結構細身で、背も同年代の女性にしてみれば高い方に違いない。

顔立ちも十人中、七、八人は美人と答えるような整い方をしている、関係者の目に留まれば、モデルにでもなれそうな雰囲気を持っていた。

彼女の名前は華蓮。長谷川華蓮。

そんなモデルのような彼女が、少し物憂げな表情で坂を上っている。傍から見れば絵になりそうな情景だったが、当の本人は現実的過ぎる悩みを抱えていた。

「はあ……」

小さく、溜め息をつく。

彼女は、町の外れにある、この緩やかな坂道を上ってはいたが、先程からあまり歩が進んでいなかった。
ぼんやりとして景色を眺めながら、考え事をしている。

「はあ、帰るのやだな……」

もう一度溜め息をつき、今度は同時に呟いた。

……彼女が悩んでいたのは、来年からの進路のことだった。華蓮は来年、高校を卒業するのだ。

彼女の父親にその事について相談すると、私立でも良いので自宅から通える近くの大学にしなさい、という返事が返ってきた。

しかし、彼女はそれだけは嫌だったので返事を曖昧にした所、それから度々、先生からだけでなく父からも進路指導を受けることになってしまったのだった……。

彼女の父は、一人娘の自由を許すタイプの間人ではなかった。

どちらかというまでも無く、堅苦しい人物であり、今までに華蓮は人並み以上の自由を与えられたことが無かった。

習い事や部活が無い時の門限は八時と決まっており、旅行にも学校の行事以外で友達と行く事は許されなかった。

中学の夏休みにたった一度だけ、母親と二人でオーストラリアに旅行に行った事があり、それが彼女にとって今までで一番自由を満喫した記憶だった。

それでも母がいた頃は、休みの日にはたまにどこかに連れて行ってもらうことがあり、そんな時は大抵父は疲れているからと家で留守番をしていたので、それほど不自由さを感じた事は無かった。

しかし華蓮が高校に入ってすぐ、両親が離婚し、華蓮は父親に引き取られることになった。

理由はあまり立ち入って聞きはしなかったが、離婚してすぐ、母は

外国に行ったらしい。……きっとその辺りが原因なのだろう。

離婚してからは、母がいない寂しさからか、父は華蓮に対してより一層干渉してくるようになった。

華蓮も父の気持ちも判らないではないので、しばらくは黙って父の言うとおりにしてきた。

だが、半年前に父が再婚してから、ずっと抑えていた彼女の欲望が沸々と湧き上がって来るのを感じていた。

義母は、確か三十過ぎで、父の取引先関係の人だという事だった。

父も一度目の結婚で学習したのか、新しい彼女の母親は夫の意見を良く聞き、決して逆らわない女性だった。

華蓮ともまだそれほど打ち解けたわけではないが、彼女の卒業が近づくとつれ、進路についての話をする機会も増えてきた。……とは

言っても、父親と同じ内容の台詞を柔らかく伝えられるだけだったが。

まだ彼女は誰にも言った事は無かったが、実はずっと外国に行きたいと考えていた。

留学、という建前を考えてはあるが、本音を言うと大学自体にはほとんど興味は無かった。彼女が外国で学びたいものは学問などではなく、もっと違う文化、違う町や人々をこの目で見てみたいと彼女は考えていたのだ。

たった一度だけ行った、母と一緒にオーストラリア。

そこで彼女は、色々な人々と出会い、彼女の母親からも外国の色々な事を聞いた。

不思議なほど、彼女の母は様々なことを知っており、それらの話を、華蓮はまるで子供が御伽噺でも聞くように夢中になって聞いていた。

その時初めて聞いたのだが、母は結婚するまでずっと、世界の文化

を研究していたらしい。

そしてそのまま職業として研究を続けようかという時に父と出会い、結婚したらしい。

だからきつと、母は今その研究の続きをやっているに違いない。

……あの旅行の夜の、母の生き生きとした顔を思い出し、華蓮は少し母が羨ましくなった。

一台の車がすぐ横を通り過ぎ、華蓮はまた現実へと意識を引き戻される。

……また景色に紅さが増してきている。

眼鏡を掛けた頑固そうな父の顔を思い出すと、到底外国なんて無理に思えてくる。

……しかし少なくとも、この町を出て一人暮らしはしてみたかった。ただの自分の願望と言っただけでなく、再婚してまだそんなに経っていない父と義母にとっても、それがよいと思うのだが……。

「何て言えばいいんだろ……？」

今日こそ言おう、今日こそ言おうと思いつつも、父を納得させるような台詞が思い浮かばず、先送りになっている毎日だった。

そんな時、彼女は決まって行く場所があった。ここから近くにある祖母の家だ。

祖母の家は、代々薙刀の道場を開いていて、華蓮も幼い頃よりそこに通っていた。というより、母の代わりにここで祖母に面倒を見てもらっていたことが多かったのだ。

その甲斐あつて、今では華蓮の薙刀の腕前は相当な物になっていたが、特に段などにはこだわっていなかった為、彼女はまた初段すら持っていなかった。

さらに、両親が離婚してからは父親があまり通うのに好意を示さな

くなつたため、華蓮は時折こつそりと通うようになっていたのだ
た。

景色の良い坂を上りきると、のんびりとした住宅街が広がっている。
所々に下町のような雰囲気が残る商店街を抜け、華蓮は古びた屋敷
の前に立った。標識には『不知火』とある。

離婚後たまに連絡をくれる母が、この前「不知火に戻って良かった」
などと言っていた事を思い出す。

娘の前でよく言えると思うが、華蓮はそんな母の奔放な所が嫌いで
はなかった。

母は現在、ドイツにいるらしい。あまり具体的に教えてくれないの
で細かくは判らないが、前にくれた電話でそう言っていた。

(ドイツか、……いいなあ)

漠然としたドイツのイメージを想像し、華蓮は羨ましさを覚えた。

いつもそうなのだが、祖母の家の門は開いていた。

いくら下町とは言っても無用心だと言っているのだが、祖母は一向
に聞こうとはしない。「この辺の人はみんな知り合いだからいいの」
と言っていた。そして実際に何か起こったことも無い。

中に入った華蓮は、玄関へは向かわず、右手にある広めの庭に向か
って歩き出す。庭には縁側があり、そこに面した居間にいつも祖母
は居るのだった。

砂利を踏み分けながら、緑が溢れる小さな庭園に足を進める。あま
り手入れはされていないようだが、それほど景観は損なわれてはい
なかった。

典型的な日本庭園の風格があり、時代劇に出てきてもおかしくはな
い。

縁側には誰もいないのを見て、華蓮は引き戸を開ける。……もちろ

ん鍵はかかっている。

見渡した場所に誰もいないのを確認して、華蓮は中に声を掛けた。

「お婆ちゃん、いるー？」

大きめの声で呼んでしばらく待つと、「はいはい」という声が出て、奥から祖母が出てくる。……どうやら食事の支度をしていらしたらしい。

「……あら、華蓮ちゃん。いらっしやい」

そうして出てきた祖母は、手早くお茶とお茶請けを用意しながら、華蓮に対して話しかける。

その一連の動作は、長年の歳月が積み重ねられているのがすぐに分かるほど無駄が無く、様になっていた。

「どうしたの？ 今日もお稽古？」

「うん。あと、こないだお母さんから連絡あったから、その報告」

「あらそう。……陽華元気だった？」

「相変わらずみたいだね。……お茶もらっていい？」

華蓮は祖母の話と、祖母が話してくれる母親の話が好きだった。

そのため、何かある度に祖母の元を訪れては現在の母の事を話し、昔の母の話を聞いていた。

「誰かに守ってもらおうとしていては駄目、大切な物は自分で守れるようになりなさい」

祖母は、母が小さい頃からそう教え、母もこの道場で薙刀を習っていたらしい。

確かにその言葉は、華蓮が幼い頃よりよく聞いていた言葉だった。

そして、華蓮も薙刀を習い始めるようになった。

練習の合間に祖母の入れてくれるお茶を飲みながら、文字通り母の武勇伝を聞くと、何だか自分も負けていられないような気になり、元気が出てくるのだった。

「だから、お父さんが何て言っても今回ばかりは引き止めさせないつもり」

「……そう、貴女ももう一人前なものね。自分の道は自分で決めるといいわ」

「うん。……でも本当の事を言つと、やっぱりちょっと不安もあるかな」

「……そう。そうよね」

「……………」

「いい物を見せてあげる」

そうとうと祖母は、奥の部屋へ戻っていった。

華蓮は特にする事も無く、ちゃぶ台の前に座りながらじっと待っていた。

今はその役目を殆ど終え、ただ一人のために立ち続けている木製の家具は、その年季からか不思議と華蓮を落ち着かせた。

何となく、日本の田舎へ行ってみるのもいいかもしれないと、そう思う。

……程なくして戻ってきた祖母は、長い棒状の物を包む袋を持っていた。

華蓮は、見てすぐにそれが薙刀だと確信する。しかも、その包みからして相当に古い物のようだった。

少し驚いている華蓮の前で、祖母はゆっくりとその包みを解いた。

……やはり、そこから現れたのは、素人目に見ても立派だと判る年代物の薙刀だった。

「これは……？」

「『焰』って言うの。うちの家宝よ」

……『焰』。とてもいい響きだ。

華蓮は一目でこの素晴らしい業物の薙刀を気に入ってしまった。そして、自然とある欲求が生まれ始める。

「……振ってみてもいい？」

「いいわよ。あなたのお母さんも昔、何か悩んでいる時にはいつもこつそり持ち出して振り回してたしねえ」

母の意外な昔話を聞き、華蓮は今も遠くにいる、最愛の家族であり親友でもある女性の過去を思った。

浮かんでくる優しい顔を眺めると、またさらに親しみが湧いてくるような気がした。

「……そうなの？お母さんらしいね」

「ええ。ふふふ」

そしてすぐに華蓮は、焰を持ったまま、ちよつとした広さのある庭へ降りた。

ここでもなら、薙刀を振り回しても垣根が邪魔をして通りからは見えないのだ。

雨が降っていない時は、いつも華蓮はその庭先で稽古をしていた。

辺りはもう完全に夕暮れとなり、紅い光が庭全体を照らしている。

緑に包まれた庭園は、一時的に秋の色を見せようとしていた。

日差しが差し込み、周囲が朱に染まる。

もう一度焰の刀身を見つめると、薙刀の刃に写った自分も何かに興

奮しているかのように顔が赤く染められていた。

……まずはしっかりと構える。

薙刀の柄を両手で掴み、その幅を肩幅より少し広く取る。半身になり、足の幅も両手と同じくらいの幅に広げた。

「全ての基本は構えから。達人は一日中構えたままでいられるものよ」

そう最初に言った祖母の言葉を思い出す。

習いたての頃は、その言葉が本当かどうか疑わしかったが、今となつては本当だと思える。それほど基本の構えは華蓮の体に染み付き、最も集中できる姿勢となつた。

今では構えるだけで、ある種の精神統一の役目も果たしてくれるほどだ。

こうしていると、全ての雑念が取り払われていくのを感じる事ができる。

別に訪れる場所は観光名所で無くても良い。そこにはどんな人々がいて、どんな暮らしをしているんだろうか。

まだまだ自分の知らない事が多すぎる。

もっと知らない所へ行ってみたい。

……頭の奥がうずうずしてきた。

そうか、判った。私の好奇心は本能だ。抑えきれはるはずがない。

「……うん、やっぱり決めた」

母もきつとこんな気持ちだったのだろう。

そう、色々考えすぎて先へ進めなくなる前に行動してみよう。

……在り来たりだけど、何もしないで後悔するより、何かして後悔した方がまだいい。そんな後悔だったら望むところだ。
湧き上がってくる好奇心を抑えきれず、華蓮は身震いした。
顔に笑顔が戻ってくる。

「おばあちゃん、私決めたよ。やっぱり……」

家の中で再び食事の支度を始めたらしい祖母に向かって、そう叫ぶ華蓮。もう答えは決まった。
だが、祖母の返事が返ってくるよりも早く、彼女の体に異変が生じた。

……何だか、足元がふらつく。

「あ、あれ……？」

目が回るような感覚。

浮遊感は不思議なほどに長く続く。

何か、水のような池のような、液体に飛び込んだような感触。
そして、華蓮の意識が途切れた。

「華蓮……？」

……庭に出た彼女の祖母が見たのは、可憐なまでに赤く染まった夕焼けの景色だけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5002q/>

新古事記

2011年12月8日04時50分発行